

LEARN AND CONNECT WITH ART / MAEBASHI ART SCHOOL PROJECT

アーツでまなび アートでつなぐ!

ま え ば し
アートスクール
計 画 @群大×アーツ前橋

実施報告書

[平成28年度文化庁大学を活用した文化芸術推進事業]美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成プログラムの構築と実施・評価 [会場]群馬大学荒牧キャンパス、アーツ前橋、前橋市中央公民館、広瀬川美術館 ほか



photo:Shinya Kigure, illustration:Kazuji Mogi

はじめに 「まえばしアートスクール計画」と広義のアートエデュケーション	1
プログラムダイジェスト 前橋をインクルーシブで創造的なまちにする	2
インクルーシブ・キーワード	8
群馬大学教育学部美術教育講座とアーツ前橋	12
実践講座 A 前橋メディアパフォーマンス	13
実践講座 B まちなかだれでも場づくりコース	19
実践講座 C まえばし未来アトリエ	25
実践講座 D 鑑賞学習アプリ開発とインルーシブなデザインアプローチ	31
集中講座 アートプロジェクトを「伝える」「残す」術を身につける	37
基礎講座 アーツが地域を拓き、地域はアーツを育てる	41
特別講座 アーツ前橋「表現の森 協働としてのアート」展 関連シンポジウム	43

※ 本書は、平成28年度文化庁大学を活用した文化芸術推進事業：美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成プログラムの構築と実施・評価「アーツでまなび アートでつなぐ! まえばしアートスクール計画@群大×アーツ前橋」(代表：群馬大学教授 茂木一司)の実施報告書として制作しました。

はじめに

「まえばしアートスクール計画」と広義のアートエデュケーション

前橋に新しい美術館・アーツ前橋ができて、群馬大学とアーツ前橋の連携による文化庁のアートマネジメント人材育成事業をすることになったとき、あらためてアート／教育のできることを考えました。理念は、「今よりも少し生きやすい〈柔軟でフラットな関係性を持つ社会・コミュニティ〉をつくるために、今アートを使うのが一番いい」です。

“現代はアートの時代だ”というドルフ・シュタイナーの言葉にもっと真摯に向き合う時が来ています。問題は専門化した世界観が生む、断片化した思考や身体が生み出す希薄な関係性と差別の解消です。アートの学びは冷えた部分をつなぎ直し、全体性を回復します。その時“弱さの力”(鷲田清一)に注目すること、子ども、障害者、高齢者などの弱者、社会のなかで生きづらさを抱え、アートから遠いところにいる人々をアートによってつないでいく、すなわち大きな理念はインクルーシブアート教育の実践です。遠回りでも、教育という営みが緩やかな問題解決をしていくはずで

す。「まえばしアートスクール計画」はアーツ前橋の館外での地域アートプロジェクトの仕組みの中でアーティストと創造的協働で学ぶプログラムで、前橋がアートの学びの実践共同体(community of practice)になる、つまり「アートするまちをつくる」でした。平成27年度は、登録制による3つの実践講座を中心に展開。平成28年度は4つの実践講座に取り組むと共に、これに連動する記録と省察・評価のための集中講座を開設。並行して、気軽に受講できる基礎講座も展開しました。この2年間でいろいろな種を蒔きましたが、まだ全部が育つまでには至っていません。“自分事として引き受ける”プレイヤーは引き続き募集が必要です。

最後に、本プログラムをご支援・ご参加いただきましたたくさんの講師、受講生、群馬大学及びアーツ前橋などの関係者の皆さま、本当にありがとうございました。

総合ディレクター／群馬大学教授 茂木一司

前橋をインクルーシブで創造的なまちにする

群馬大学とアート前橋の連携により平成27年度に始まり、平成28年度はさらにプログラムを増やして展開された「まえばしアートスクール計画」。アート前橋が開館して3年目を迎え、多様な活動が生まれつつある前橋の中心市街地で行われた取り組みを振り返ります。

茂木 一司（群馬大学教授）

住友 文彦（アート前橋館長）

手塚 千尋（東京福祉大学短期大学部専任講師／NPO法人まえばしプロジェクト）※ 実践講座Cコース講師

住友 1年目にこのコースを始めたとき、アート前橋は開館して1年半とまだ間もない頃でした。参加者が、東京や地方の芸術祭に行くことができなくても、この講座を通して全国の様々な場所で活躍している人の話を聞いて、「何か始められそうだな」と自信を持つことができるのが重要だなと感じていました。

茂木 一番の成果と言えるのは、今まで来なかったような人が少しずつ増えてきたことでしょうか。Cコースでやっているカフェに、この講座のことを何も知らない人が訪れて、参加者になりました。今まで無関係だった人が関わりを持てるようになったというのが重要なポイントかなと思います。

手塚 カフェに来たことをきっかけに受講生になった70代の方は、最後まで積極的に参加していましたね。参加の自由度も高く、間口を広くしていたので学生とアート前橋サポーター以外に、教員や福祉関係の人たちも参

加していました。

間口の広さと体験の深さ

住友 一方で体験の深さも大事です。アートプロジェクトっていろんな失敗をしたり、壁を感じたりする経験が大事なのですが、「講座」という形で、たくさんの人とともに実践すると、そういう経験がしにくくなるんですよね。Aコースは人数をしばって、ある程度積極的に関わる人を中核に置いてやったので、そういう人たちにとってすごく濃密な体験をすることができたと思います。ある程度明確なプロジェクトとして広い地域をリサーチすることになっていたのも、最初の半年の短期間でよくやったなと。「講座」が持っている仕組みとアートプロジェクトのクリエーションを折り合わせるやり方でした。

茂木 2年目ということで、講座の組み立て方も工夫しま

した。基礎講座では、アート以外の分野に関心がある人にも講座に参加してほしいだったので、様々な分野からゲストを呼び、各回限りの参加も歓迎しました。福祉とアートをテーマにした講座では人も集まり、社会課題として関心の高まりを感じました。

集中講座は実践講座の受講生のみを対象とした位置づけとして、学びを生かしてもらえよう、記録と評価を軸にしたアドバンス的な内容にしました。講師はそれぞれの立場から実践的な話をしてくれたので、熱心に参加してくれた方にとっては役に立ったかなという感じですね。実際に、記録や評価をやってみたくらいという人が積極的に参加していたようでした。



（左より）手塚、茂木、住友

実践講座 A | 前橋メディアパフォーマンス

土地の記憶をリサーチすることで、新たな表現やコミュニケーションを生み出す現代アートの手法を学びながら、地域アートプロジェクトの可能性をアーティストの Port B(高山明、林立騎、田中沙季)、猪股剛と共に考えることを目的に実施しました。前橋市内でインドシナ難民を長年受け入れてきた施設「あかつきの村」を中心に、社会における共同体形成の歴史を調査し、アーティストのリサーチに受講生は同行しながら、日本における社会的マイノリティの問題を深め、アーティスト独自の社会へのアプローチを学びました。また、リサーチは最終的にアート前橋で開催された「表現の森 協働としてのアート」展(2016年7月22日～9月25日)の出品作品《前橋聖務日課》として発表され、展示室のギャラリー内でそれぞれのテーマの専門家を招き連続フォーラムを開催。議論の場を一般にも公開し、メディアパフォーマンスとして作品発表を行いました。



「あかつきの村」インタビュー収録

実践講座 B | まちなかだれでも場づくりコース

アートによるまちづくりには、多様性を活かし、対話を通して場づくりができる人材が欠かせません。コミュニティ研究、インクルーシブな場づくりを実践する坂倉杏介(東京都市大学)、井尻貴子(NPO 法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所)がコーディネーターとなり、講座を運営しました。まちにいる多様な人々が自らの力を活かし、いきいきと暮らしていくために、まちにはどのような「場」が必要なのか。前橋のまちなかをフィールドに、全3回の対話ゼミ、全4回の実践ゼミに加え、2日間の集中講座を実施。毎回違うゲストをお招きし、レクチャーと対話、ワークショップを通して、「多様な人が集い、つながりと活動を生み出す場づくり」について話し合い、考えを深めていきました。



実践ゼミ(11/20) まちなかりサーチ



前橋中央通りアーケード商店街

前橋がアクティブになる

住友 実際、アーツ前橋のサポーターさんたちの活動がアクティブになっている場面があって。自分たちの活動の積極的な関わり合いをみつけるきっかけになっているだろうな、と感じています。

美術館の利用者を同心円で表すと、美術が好きな人たちが中心にいて、その周りのドーナツ状の中間層ぐらいの人たちは、もともと美術の勉強していたわけではないけれど、知的好奇心を持った人たちなんです。そういう人たちが、いかにアクティブになっていくかということが5年、10年先の美術館にとって大切だと思っているので、そういったところのための種蒔きだったんだと改めて思いますね。

例えば、Bコースでまちづくりに関わるゲストのレクチャーで聞いたことなんかは、今後自分たちで活動を始めて問題に直面したときに、参考になると思うんですよ。素地をつくっていくための引き出しを増やすということにはなった



広瀬川美術館

はずです。

手塚 Cコースでも、アーティストの住中浩史さんが来て、住中さん流のアートによる場づくり(まちづくり)の話をしてくださったのが印象に残っています。それは、講師が先導するプロジェクトのあり方ではなくて、一緒に考え、自分たちで動かせるようになったら、講師はひいていく、というようなやり方なんです。

実際コーディネーターとして入った今回の講座では、スケジュールに追われて、参加者とゆっくり考えながら進めていく難しさを感じていたもので、いつか“住中流”でもやってみたいな、と思いました。

アートとは何か

茂木 どのコースでも、最終的にはこの講座を何のためにやっているのか、という話になる場面があって。そうする



実践講座C

と結局「アートとは何か」という話になっていくんです。

住友 みんながなんらかの形でそのテーマを考えることができたのは良かったですね。Dコースは去年から話し合いに時間をかけて、参加者の人たちが自分たちで考える場面が多かったので、参加者の学びとしては大きかったと思います。

手塚 Cコースも振り返りをやっていたときに、普段の仕事や社会的な立場や地位があって、それを脱いだ時の自分とは何者なのかということを語る人たちもいましたね。例えば、「今まで自分は“学校の先生”的な発想でいろんなことを見ていたけれど、それが全てじゃないことに気づきました」という発言や「自分は何も考えてなかったことがわかりました」という学生の言葉もあったりして。

茂木 自分が今やっている仕事というのは本当に自分の



実践講座D

仕事なのかということをおもみんなが思っていて。それがアートに向かっているというのは、自然なことのような気がしますね。アートに触れる体験を通して、何か実感を得られることが多いみたいです。つまりそれは、自分があまり明確なものをもって社会と向き合っていないというようなことかもしれないですけど。そこにアートの役割があるのかなと感じますね。



実践講座 C | まえばし未来アトリエ

「インクルーシブ美術教育による社会実験：広瀬川美術館からの発信！」をテーマに、かつて子ども絵画教室「ラボンヌ」と大人向け講座「生活造型実験室」によって地域・市民の美術教育の拠点であった広瀬川美術館（画家・近藤嘉男氏旧アトリエ）を活用して、この場を「まえばし未来アトリエ」として再生することを目指しました。

① 展覧会の計画・実施に取り組む実践講座、② インクルーシブカフェ「kinäii / きない」、③ インクルーシブアートに関わる出前ワークショップの実践、④ まえばしアートスクール計画研究会の4つの事業で構成され、これらの活動を通して受講生と共に「アートでつなぐ場」としての新たな意味や価値の創出と発信を試みました。



オープニングパーティー(6/12)

実践講座 D | 鑑賞学習アプリ開発とインクルーシブなデザインアプローチ

鑑賞は表現・制作と表裏一体の活動であり、アートや美術館を楽しむ方法として有効です。本コースは昨年度から継続して開講していました。昨年度は美術家・映像ディレクター山城大督を講師として迎え、アーツ前橋オリジナルの『デジタル・ミュージアム・ガイド』のプロトタイプを発案・開発するアートプロジェクトに講座の受講生と共に取り組みました。開講2年目となる本年度は、鑑賞ウォーミングアップツール《folks / フォークス》の完成と公開を目指しました。講座ではメイン講師の山城大督を中心に、ゲスト講師として八巻香澄、会田大也、伊藤ガビン、ジュリア・カセム、ライラ・カセム、中西要介、林洋介らを招き、実践的な対話と考察を繰り返しました。



鑑賞ウォーミングアップツール
《folks / フォークス》



これからのまえばしアートスクール計画

茂木 まえばしアートスクール計画は前橋が生きている(人の)ようにアートで学ぶまちにしたいという気持ちを込めて命名しました。でも、群馬大学は中心街から遠いので、今まで積極的に関わりをもてなかったことがありました。地方の大学はミッションとして、「地域貢献」を提唱するようになりました。でも実際には「地域貢献」に本気で取り組もうとしていないのではないかと感じる場面もあります。確かに面倒さや煩わしさはあるけれど、そこをやらうとしないといけないと思うんです。次の展望としては、やはり蒔いた種が枯れないようにということと、新しい種を蒔くことの両方をやらないといけないということですね。あとは小さくてもいいから、人が気楽に来られるような場所や、面白いお店や人、いろんな点がまちの中にもっと増えないといけないと思っています。前橋の中にも様々な動



実践講座C

きがあるみたいなので、一気に変わるかもしれないと期待もしています。その中で、この辺の地域や前橋全体、そして前橋から日本を見たときに、大学や僕らは何をすることができるのかということをもっと意識して考えていきたいと思っています。

住友 前橋は、「何でもあるけど何も無い」なんて言われているけど、本当はないわけじゃないんですね。自分が実際どこかに行ってみたり、人と会ったりしたときに面白いと思う経験というのは、どこにでも必ずあるはずなんです。身の回りの具体的な体験を通して、困っていることや楽しいこと、そうした感性的なはたらきを行動に結びつけることが、人文学やアートの大事なことだと思うんです。日常生活の中で面白いことをやろうとするのは、今の地域、そして大学や美術館が目指す方向に重なっていくんじゃないかと思っています。

この講座を通して、知識や情報を得た人たちが、これを次



基礎講座

に生かしたい、形にしたいと思うかどうか。アートは形式の中に入らないものをどう形にしよう、実現しようとするものなので、そういうイレギュラーなものをどんどん楽しむ方向に、今回の経験を生かしてくれればとすごく良いなと思いますね。

手塚 そうして試したいという気持ちになる人が出てきたら、今度はそうした人たちを支えることが必要になるかもしれませんね。そういうときに相談に乗るとか、コーディネートの手伝いをするとかできたら良いなと思います。

茂木 僕らも伴走していきたいですね。そんな人が増えたら、前橋で何か新しい動きが生まれるような気がしています。



茂木 一司 (もぎかずし)
群馬大学教育学部教授/NPO法人WSD推進機構理事長/NPO法人まえばしプロジェクト代表
専門:美術科教育、ワークショップ学習論、インクルーシブ美術教育。群馬県生まれ。筑波大学大学院芸術研究科修了。九州芸術工科大学大学院博士後期課程芸術工学研究科情報伝達専攻修了。博士(芸術工学)。鹿児島大学教育学部助教授を経て、現職。ワークショップ学習論からインクルーシブ美術教育を研究中。著書に、『協同と表現のワークショップ』(代表編集)、『ワークショップと学び2』(共著)、『色のまなび事典』(3巻、共編書)ほか。



住友 文彦 (すみともふみひこ)
アーツ前橋館長/東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授
1971年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。あいちトリエンナーレ2013、メディア・シティ・ソウル2010(ソウル市美術館)の共同キュレーター。NPO法人アーツインシアティヴトウキョウ(AIT)創立メンバー。展覧会に、『Possible Futures: アート&テクノロジー過去と未来』展 (ICC・東京・2005)、『川俣正 [通路]』(東京都現代美術館・東京・2008)、ヨコハマ国際映像祭2009ほか。共著に、『キュレーターになる!』ほか。



手塚 千尋 (てつかちひろ)
東京福祉大学短期大学部専任講師/NPO法人まえばしプロジェクト
群馬大学大学院教育学研究科修了。兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科修了。博士(学校教育学)。
アートによる協同的な学びの学習環境デザインの研究をはじめ。即興的に生まれるアートならではのコラボレーションや集団で創造性を発揮する経験を学習科学の視点から明らかにする研究に取り組む。著書に、『協同と表現のワークショップ』(共著)、『色のまなび事典』(編集)ほか。

基礎講座 | アーツが地域を拓き、地域はアーツを育てる

前橋をインクルーシブでサスティナブルなコミュニティに再生することを意識して、「アートプロジェクトと学び」「食とアート」「福祉とアート」「映画とジェンダー」「医療とアート」「身体性のインクルージョン」などをテーマとした、各回単発でも気軽に参加できるゲストトークとディスカッションを全8回開講。また、アーツ前橋「表現の森 協働としてのアート」展と連動した関連シンポジウムも開催しました。多様なテーマや講師によって語られた、地域と関わるアートプロジェクトの可能性や課題は、参加者に多くの刺激を与えました。



福祉とアート(7/16)

集中講座 | アートプロジェクトを「伝える」「残す」術を身につける

実践講座受講生を対象に「広報・記録・アーカイブ・評価」をテーマとしたレクチャーやワークショップを実施。実践の場で生かせる知識と具体的な手法を学びました。写真・映像撮影、インタビューの取り方のコツを知る、活動を広報するため、報告書に収録するための原稿制作に取り組んでみる、評価のためのロジックモデル(案)を作成してみるなど、各実践講座における取り組みを具体的に形にしてみる作業にも挑戦しました。また、中間報告会や最終報告会など、各実践講座受講生が集まる場での振り返りや、交流の場づくりなどを行いました。



アートプロジェクトの実践と記録術(6/19)

インクルーシブ・キーワード

基礎講座では、多様なゲストによる

「前橋をインクルーシブで創造的なまちにする」ための多くのキーワードを聞くことができました。その一部を抜粋してご紹介します。

講座1:アートプロジェクトにおける地域研究の重要性

調査するときは「搾取をしない」。「調べる」ということは「情報をもらう」ということ。何か、きちんとお返しをして、世の中のためになるよう気をつけていきたい。

山田創平
京都精華大学人文学部総合人文学科長/准教授

アーティストは、何か物をつくり、形にするということでは、非常にいろいろなスキルやアイデアを持っているのだけれども、地域に出ていくと、そのように「知っている人」ではなくなって、関わる人との関係性で逆転するという現象が起きているのです。

住友文彦

地域の中で活動するとき、あえて「アート」と言わなくても具体的な作業がそこにあることが、関わりを生み出すきっかけになっていると考えています。

雨森信
大阪市立大学文学部 特任講師/成安造形大学客員 准教授/ Breaker Project ディレクター

アートから最も遠い人たちが、アーツ前橋や、アートに関心を持って、いろいろ関わってくると、まちも、人も、ことも、いろいろなことが、少しは元気になるのかなというようなことを、少し考えています。

茂木一司

講座2:地域に根ざしたアートプロジェクトの実践とそのマネジメント

ただ待っているだけでは、美術館に来てもらえない。「どのような人がいて、どのようなことをやっているのか」ということを外に出かけていき、知ってもらう活動を心がけています。

郷泰典
東京都現代美術館学芸員

講座3:アートプロジェクトと学び

「観察」はもちろん大事だし、楽しいのだけれども、「想像」の割合も美術体験の中ではとても大きい。自分だけでなく「人がどう感じたか」というようなものを聞く行為は有効だと思う。

住友文彦

「地域」という中には、自分、そして組織だったり、多様な見解、視野、視座が混在している。そこで主体者は、一体どのような立ち位置で、関係づくりや学びの仕組みをつくらなければいけないのか。まずは1度、誰と関係を育みたいかを考え、同時に、「学校」というフレームから外したところに見えてくる世界を想像する必要がある。

菊池宏子
アーティスト/コミュニティデザイナー

「食がアートになりえるか？」は、「アートとは何なのかを考えることであるということだ」と思っています。

中山晴奈
アーティスト

講座4:食とアート

食べものにかかわる作品展示やワークショップには、かならず人の生が関わる。その「生の手触り」とともに作品も成立する。

森岡祥倫
東京造形大学教授

本来、面白かったものが削り取られていく可能性があるけれども、そのことも分かった上で、形式的な形ではない表現ができたときに、非常にも面白いものができると思う。

住友文彦

よく分からないものをよく分からないまま受け入れるところがあって、アーティストはアーティストでその場において、自分の中で閉じることがなく、自分から見た他者の世界や身体感覚が主役になっていく。そのような創造性の豊かさの証明のようなことこそが表現だと思う。

高橋伸行
アーティスト
やさしい美術プロジェクトディレクター

茂木一司

講座7:医療とアート

何回も繰り返し、コミュニティの人たちのなりたいたい姿や、やりたいこと、どのような夢のコミュニティにしたいのかということを引き出す。この、対話を通じた創造こそが、マネージャーの醍醐味のひとつではないかと思います。

山口(中上)悦子
大阪市立大学大学院医学研究科医療安全管理学准教授
大阪市立大学医学部附属病院医療安全管理部副部長

医療とアートにある共通性は、分からないことを共有し合うこと、あるいは、分からないけれどもずっと関係性を持ち続けていくこと。それによって、変化を楽しんでいくというようなことができればいい。

茂木一司

「同じものを見ているでしょ」と思っていたら、実は全く違うように見えていたということはよく起こる。見る側の多様性を引き込むことで経験自体が豊かになる。

伊藤亜紗
東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授

異文化というものは、よその国とかだけじゃなくて、結構僕たちの身近にたくさんある。同じツールを思わぬやり方で使う人に出会うと、それがぱっと見えるようになってくる。

細馬宏通
滋賀県立大学人間文化学部教授

相手を鏡にして自分を見るということ。その相手は1人だけではなくて、世界と言ってもいい。自分がどのように映っているのかということ自分をメタ認知できないと、なかなか次のことができないのです。

茂木一司

インクルーシブはとても大事なことだが、あえてインクルーシブしたくないという人や施設もたくさんある。開くことと日常とのバランスを意識してアート活動を行っていききたい。

今中博之
社会福祉法人 素王会理事長/アトリエ インカーブ クリエイティブディレクター

講座5:福祉とアート

スタッフはアーティストが創作に専念できる環境を整えて、そっと見守り、じっと待つ。創造・創作に関しては何の手出しもせずに、創作にまつわる社会とのやり取りの部分に手を貸していくことを仕事としています。

三宅優子
アトリエ インカーブ

「現代美術」というものがあって、その外側に膨大な量の表現というものが実はある。その中のひとつに、「現代美術」が排除してきた、障害のある人のアートというものもある。

服部正
甲南大学文学部准教授

皆、何かを抱えているし、何かを抱えることになるかもしれないのです。だから、この社会はそのようなことに対して寛容で、「あ、そうなんだ」とお互いに聞き合えるような場所が、もっとできていけばいいなと思います。

坂上香
映画監督

講座6:映画とジェンダー

カメラを向けてしまうということは、関係性を築かなければ、ある意味ひとつの暴力になるということがあると思うのです。だからドキュメンタリー作家は、そこを乗り越えていかなければいけない部分があるのだと、改めて思います。

志尾睦子
シネマテークたかさき総支配人

「ワーク・イン・プロGRESS」のような活動、作品の制作をしているときに話し合いの場があって、それがまた次に生きていくというやり方がいい。

住友文彦

群馬大学教育学部美術教育講座(群大)とアート前橋 近年の取り組みと地域の状況

美術館(博物館相当施設)としての機能を担うアート前橋と美術教育分野の研究・教員養成を担ってきた群馬大学。「**美術**」と「**教育**」へそれぞれに組み込みながらも、群馬県/前橋市という地域との関わりについても真摯に向きあう中で始まったのが、本文文化庁事業(美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成研修プログラム)でした。美術表現や教育のあり方が多様になりつつあるなかで、美術館と大学がそれぞれの**専門性を生かしながら**



地域に関わることによる可能性を様々に感じることができました。アート前橋の活動を支えるサポーターの**学びをより深める**機会として――。学生が**実感を持って地域に関わる**ことのできる機会として――。美術や教育と普段は縁のない方を含めた**出会いの場**として――。地域リサーチを通して**新たな芸術表現**の可能性を見出す機会として――。一方、様々な個人・任意団体を含むNPOや民間組織による、美術や教育とも親和性の高い、**創造的な活動**が群馬県内及び前橋市内では活発になってきています。興味深い変化を感じることのできる地域の状況があるなかで、本事業に続く活動が期待されます。

橋本誠(一般社団法人ノマドプロダクション) ※ 集中講座コーディネーター

平成25年

群大を中心に、前橋市児童文化センター・清心幼稚園において「遠足プロジェクト@まえばし 2013」(2月)、(中之条ビエンナーレ 2013)において「こどもわーくしょっぷ@ぐんだいびじゅつ」(9～10月、写真上)を開催。地方大学のミッションのひとつ「地域貢献」への新しいアプローチを行いました。

アート前橋 開館(10月)。記念展「カゼイロノハナ 未来への対話」などの開催と並行して、地域アートプロジェクトを展開。前橋の中心市街地に、アートによる新しい風が吹きはじめました。



平成26年

アート前橋「シンポジウム ～地域とアートを紡ぐ3日間～」開催(2月、写真中)。国内外よりアートプロジェクトやアーティスト・イン・レジデンス関係者が集い、群馬県内の関係者と交流、「創造的環境の条件」について意見を交わしました。



群大が群馬県立近代美術館と連携して「Gの杜プロジェクト かこ・いま・みらい」を開催(9～11月)。親子で一緒に楽しめる参加体験型のワークショップやイベントを行いました。

平成27年

「アーツであう、アートでむすぶ in まえばし」開催(文化庁大学を活用した文化芸術推進事業)。アートプロジェクトに関わる6名のゲストを招いた2日間の基礎講座と、アーティスト(中島佑太、中山晴奈、山城大督)と共に取り組む実践講座3コースなどを展開しました(写真下)。



平成28年

アーツでまなび アートでつなぐ! 「まえばしアートスクール計画」開催(文化庁大学を活用した文化芸術推進事業)。アート前橋「表現の森 協働としてのアート」展との連携を含む実践講座4コースと集中講座、前年度より参加者の関心を広げ内容を充実させた基礎講座を展開しました。

実践講座 A | 前橋メディアパフォーマンス

土地の記憶をリサーチすることで、新たな表現やコミュニケーションを生み出す現代アートの手法を学びながら、地域アートプロジェクトの可能性をアーティストの Port B(高山明、林立騎、田中沙季)、猪股剛と共に考えることを目的に実施しました。前橋市内でインドシナ難民を長年受け入れてきた施設「あかつきの村」を中心に、社会における共同体形成の歴史を調査し、アーティストのリサーチに受講生は同行しながら、日本における社会的マイノリティの問題を深め、アーティスト独自の社会へのアプローチを学びました。

また、リサーチは最終的にアート前橋で開催された「表現の森 協働としてのアート」展(2016年7月22日～9月25日)の出品作品《前橋聖務日課》として発表され、展示室のギャラリー内でそれぞれのテーマの専門家を招き連続フォーラムを開催。議論の場を一般にも公開し、メディアパフォーマンスとして作品発表を行いました。





講座・リサーチ

Port Bの創作手法について知る、メンバーによるリサーチ活動に同行する、リサーチ対象となった「あかつきの村」について知るなど、少人数コースならではの、創作活動に密接した体験の機会を設けました。

- 4月1日(金)
① これからの企画内容の検討
- 4月8日(金)
② あかつきの村見学
- 5月26日(木)
③ これまでのPort Bのプロジェクトの説明とアーツ前橋の活動に関する概要説明
- ゲスト 猪股剛(臨床心理士)、小野正嗣(小説家)

- 6月21日(火)
④ フォーラムとメディアパフォーマンスについて
- ゲスト 宇賀神雅裕(映像作家)、猪股剛(臨床心理士)
- 6月22日(水)
⑤ あかつきの村と利用者のサンさんについて
- ゲスト 宇賀神雅裕(映像作家)、佐藤明子(あかつきの村スタッフ)



前橋聖務日課

映像インスタレーション、朗読、連続フォーラム、地元ジャーナリストによるレポートという形で展開された、Port Bによるメディアパフォーマンス。リサーチに基づく表現の発表方法と新たな市民参加の在り方を試みる独自のプロジェクト形式です。



映像インスタレーション

リサーチをもとに、2つの映像、リサーチをまとめたテキストと資料で構成されるインスタレーション作品を発表しました。また、展示場所で毎日行われる市民による資料の朗読という要素も作品に加わりました。

地元ジャーナリストによるレポート

連続フォーラムのレポートを、3人の市民ジャーナリストとPort 観光リサーチセンターの林立騎の計4人が毎回執筆。フェイスブックページにアップし、誰でも閲覧できるようにしました。



連続フォーラム

展覧会関連イベントとして一般公開。毎回美術作家や小説家などのゲストを招き、リサーチ対象となった施設のスタッフや作品に関わった市民、受講生、Port Bのメンバーを交えて対話を重ねました。



- 7月23日(土)
① 赤城山とあかつきの村について/アジールの形成
- ゲスト 石倉敏明(人類学者/神話学者)
対談者 猪股剛、Port B
- あかつきの村の共同性について、土地性、人類学、神話の視点からディスカッションしました。作品のなかに登場するサンさん(ベトナム難民)と佐藤さん(あかつきの村スタッフ)との関係が恋愛を超えた神々しさを感じるなどといった興味深い話が飛び交いました。☆



- 7月30日(土)
② 「ものがたり」について Port B《前橋聖務日課》を通じて
- ゲスト 蓮沼昌宏(アーティスト)
対談者 猪股剛、Port B
- 近年「物語」をテーマに作品制作を続けている蓮沼氏が作品への応答として、フォーラムの冒頭、テーブルの上に大きな絵を描き、そこから対話が展開しました。私たちが生きる上で「物語」がもつ必要性和あやうさについての議論は、初回の共同性や宗教性のテーマともつながっていました。



- 8月13日(土)
③ 難民たちの体験を芸術はどのように切り取り表現することが可能なのか
- ゲスト 小野正嗣(小説家)
対談者 猪股剛、Port B
- 難民、避難民、障害者、弱者と呼ばれる人々がすぐそばにいる現在、その言葉を奪うような「代弁」ではなく、そこに寄り添い、応える身振りは、言葉は、コミットメントは、どのようにして可能なのか。社会における「物語」と「ボーダー(境界線)」の関係を出発点に、対話が広がりました。



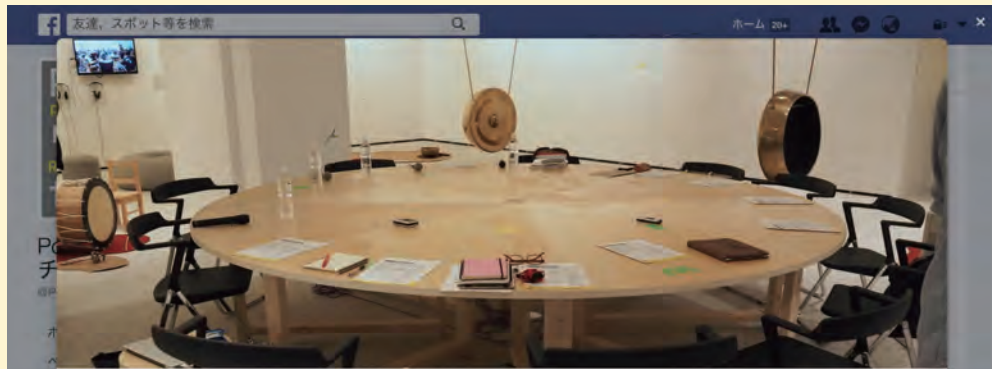
- 9月3日(土)
④ 《前橋聖務日課》における朗読の役割
- ゲスト 天笠恵子(朗読者)、櫻井洋樹(あかつきの村精神保険福祉士)
対談者 猪股剛、Port B
- 日々の営みと、それが生む変化のことが話し合われました。これまでの議論に結論をつけるのではなく、参加者ひとりひとりの日々の生活へとつながっていくような対話によって、フォーラムが幕を閉じました。



☆は集中講座における受講生成文を編集した原稿です

フォーラムレポート

4人の手による連続フォーラムのレポートは、フェイスブックページ「Port観光リサーチセンター」(www.facebook.com/PortTRC/)上で「報道／報告」されました。



《前橋聖務日課》第1回フォーラム報告：福西敏宏

PORT観光リサーチセンター・2016年7月28日

2016年7月23日、アーツ前橋の新しい企画展、「表現の森」の関連プログラムとして開催される、Port B《前橋聖務日課》の連続フォーラムの第一回に参加した。ゲストは、文化人類学者の石倉敏明。聞き手に、臨床心理士の猪股剛、Port B主宰の高山明とリサーチャーの林立騎の3人、また参加者は20人弱といったところだろうか。

話はさまざまなテーマに及んだが、核心には、群馬出身の石倉が偶然にも今回のプロジェクトの中心となる「あかつきの村」と、家族を通じて非常に深くつながっていたというエピソードがある。それを石倉が知ったのはこの数日前のことで、そのことへの興奮とその偶然自体の意味があまりに深く、さまざまに語られた、石倉による文化人類学的な見地からの赤城山という場所への考察、猪股の臨床心理士としての見地からのあかつきの村への考察などが、若干上滑りしてしまったというか、石倉の個人的なエピソードの重みに拮抗しえなかったという印象を受けた。むしろ、可能であれば、時間をおいて石倉がこの偶然を消化した上で話をじっくり聞きたかと思わせた。とはいえ、今回のフォーラムでの話自体も非常に興味深く、さまざまなことを考えさせられた。

アーツ前橋の「表現の森」は、社会包摂などをテーマにした展覧会で、Port Bは、「あかつきの村」という、赤城山麓にあるベトナム難民の障害をもった人たちへ生活支援などを行っているカトリック系の施設を取材しながら、それを通じて、コミュニティの問題を考え、アートの可能性を探るといった意欲的なプロジェクトを行っている。

障害を持った人たちの創作活動を、アウトサイダーアートとか、アールブリュットなどとして取り上げることに関して、個人的にはもやもやとした複雑な思いを抱いてしまう。いわゆる、「社会的弱者」とされる人々をどう受け止めるのか、それは人間存在の根源に関わる、非常に大きく深い問題だ。しかし、それらをアートとしてとりあげてしまうことで、表面的な「善意」や「共感」によって、その問題の大きさ・深さから目をそらしてしまうような感じを持つてしまうのだ。今回の「表現の森」展はそういった単純な見方を相対化していて、特にこのPort Bのプロジェクトは、単に障害を持った人と社会という単純な枠組みでなく、個人と社会（共同体）を深い次元で考えようとするもので、非常に興味深いものだ。今回の第一回のフォーラムでも、冒頭に書いた石倉の個人的なエピソードから、「あかつきの村」と赤城山を軸に、死と生、異界について、原理主義と共同体などのテーマが語られた。その中でも心に強く残ったのが、人間の中の動物性、人間でないものを含む共同性、などという言葉だった。

参加者の声

スモールステップをクリアしてスキルを得る講座ではない。そのため、受講生には高い学びの能力が求められた。大学側スタッフとして関わり思うのは、講座の構造や学修成果を明確に説明できない難しさは残るが、一定の能力を持つ受講生には高い学びの機会になったことである。このことは、受講生の関心に講師が寄り添うスタイルとは異なる新たな育成講座を予期させるものだった。(喜多村徹雄)

Port Bは丁寧なリサーチと多角的な批評から対話的に作品をつくる。それは分析して対象を「解(ほ)どく」ことであると同時に虚構を物語り「紡ぐ」過程なのだ。そして作品は大きなプロセスの一断面、上演前後の時間の結節点にすぎないことも垣間見た。本質は状況する時間全体にあり、作品を作るために考え語り合ったことと作品を見て考え語り合ったことにある。私にとってはその一連が長大な始まりも終わりもない演劇を見るようだった。(小出和彦)

今の私に言えることは、なにか適当な言葉を見繕って《前橋聖務日課》を片付けたくはないということだ。私とPort Bの関係は展示に来た鑑賞者より近く、制作の関係者にしては遠い。私は受講生という言葉を使い、制作過程をかいまむように覗き見していたに過ぎない。過程や作品を見て感じたことは確かだが、焼き付けたものが自分の中に落ちてくるまで時間をかけて待つ。そのときに自分から語られることは何なのかを楽しみたい。(山本千愛)

プロジェクト評価のためのロジックモデル(案) ※ 集中講座ワークショップにより作成(原案:熊谷薫)



総括

本講座は、Port Bの作品制作と密接にかかわる形で進行された。今回の講座を通じて発表された《前橋聖務日課》には、3つの大きな柱があった。1つ目に、私たちのリサーチの対象となった「あかつきの村」の歴史、共同体性、精神性を伝えるための映像制作である。リサーチを通じて制作されたこれらの映像が「表現の森 協働としてのアート」展(会期：2016年7月22日～9月25日、会場：アーツ前橋)にて展示され、来館者に対して最初に本講座で考える共同体、移民、社会、障害などの大枠のテーマを提示する要素となった。本映像では、あかつきの村の施設利用者のサンさんと施設スタッフの佐藤さんの二人の親密な関係性が語られる。2つ目に、展覧会の会期中に毎日16時から1時間程度開催された朗読である。映像に登場する佐藤さんがサンさんに初めて出会った時の数日間の研修の様子が描かれた『修練記実習記録』が天笠恵子さんによって朗読された。3つ目は、展覧会期中5回(うち1回は表現の森展関連シンポジウム内で開催された)「境界」「移民」「語り」などのあかつきの村のリサーチを通じて出てきたテーマについて公開フォーラムを開催した。地元の新聞記者の方達にもご参加いただき、フォーラムの内容をその都度記事にし、フォーラム用に設置されたフェイスブックページにて一般に広く公開した。

受講生は、これらの作品が出来るまでのリサーチ、構想、作品制作、作品公開、朗読、フォーラムに一般の鑑賞者よりもより近いところから観察し、考察をしたと言える。学びの目的が明確に示され、講師が手取り足取り教えてくれるような講座とは明らかに異なる主旨ではあったものの、作家が地域の具体的な事例から幾つかのステップを確実に踏んで1つの作品体系として思想を提示するプロセスを目撃する貴重な機会であったと言える。

今井 朋 (アーツ前橋学芸員)

実践講座 B | まちなかだれでも場づくりコース

アートによるまちづくりには、多様性を活かし、対話を通して場づくりができる人材が欠かせません。コミュニティ研究、インクルーシブな場づくりを実践する坂倉杏介(東京都市大学)、井尻貴子(NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所)がコーディネーターとなり、講座を運営しました。まちにいる多様な人々が自らの力を活かし、いきいきと暮らしていくために、まちにはどのような「場」が必要なのか。前橋のまちなかをフィールドに、全3回の対話ゼミ、全4回の実践ゼミに加え、2日間の集中講座を実施。毎回違うゲストをお招きし、レクチャーと対話、ワークショップを通して、「多様な人が集い、つながりと活動を生み出す場づくり」について話し合い、考えを深めていきました。



実践講座 A | 前橋メディアパフォーマンス

日程	平成28年4月1日(金)～9月3日(土) 全9回
会場	アーツ前橋スタジオ・地下ギャラリー、社会福祉法人フランシスコの町 あかつきの村
受講生数	2人
講師	高山明、林立騎、田中沙季 (Port B)
コーディネーター	今井朋



高山明 (たかやまあきら)

東京藝術大学大学院映像研究科准教授。1969年生まれ。Port B主宰。既存の演劇の枠組を超えた作品群を発表。観客論を軸に据え、現実の都市や社会に「演劇=客席」を拡張していく手法により、演劇のアーキテクチャを更新し、社会のなかに新たなプラットフォームを作ることを試みている。観光、建築、様々なメディアといった異分野とのコラボレーションに活動の領域を拡げ、演劇的発想・思考によって様々なジャンルでの可能性の開拓に取り組んでいる。



林立騎 (はやし たつき)

翻訳者/演劇研究者。一般社団法人Port観光リサーチセンター所長。東京藝術大学特任講師(geidaiRAM)、京都造形芸術大学非常勤講師。NPO法人芸術公社ディレクター・コレクティブ、港区文化芸術サポート事業評価員。訳書にイェリネク『光のない。』(第5回小田島雄志翻訳戯曲賞)、共編著に『Die Evakuierung des Theaters』。



田中沙季 (たなかさき)

舞台制作会社CSB勤務後、2009年よりPort Bによるプロジェクトに、制作・インタビュアー・リサーチャーとして参加。芸術作品と現実の都市や社会のあいだのリサーチを軸に活動。一般社団法人Port観光リサーチセンター研究員。一般社団法人日本パフォーマンス/アート研究所メンバー。株式会社感電社が発行するブルースマガジンにて外国人労働者を紹介するコーナーを担当中。





対話ゼミ

多様な分野で場づくりに関わるゲストを迎え、その活動についてお話をいただきました。その後、受講生を交えて大きな輪をつくり、前橋のまちなかではどう活かせるか、ディスカッションを行いました。



6月25日(土)

① まちでコミュニティスペースを運営する

ゲスト 岩中可南子(シバウラハウス) × 加藤亮子(芝の家)

キーワード コミュニティスペース、母親の働き方、ローカルビジネス、多世代が集う場
東京都港区における、いろいろな人が集まるコミュニティスペースの事例。最初のうちはなかなか人が集まらず、運営を軌道に乗せることが難しいけれど、少しずつ多様な人が参加するようになり、様々な企画を開催していることが分かりました。前橋でこのようなコミュニティスペースを運営するとしたらという話になると、「前橋のまちなかでそういう動きをしているのは、男性ばかりで、どうやって女性を増やしていけば良いのか」という課題が明らかになりました。☆



7月9日(土)

② 地域の人の力を生かしたアート活動

ゲスト 吉川由美(ENVISI) × 小山田徹(美術家)

キーワード アート、対話、地域の人の力を生かす

吉川氏が東日本大震災以前から南三陸町で展開している、きりこアートプロジェクトの話や、小山田氏がインターネットのなかった90年代に京都で運営していたコミュニティカフェの話などを聞きました。ゲストと参加者によるディスカッションでは、事例を前橋に置き換えたかどうか？前橋にはどんな課題があるか？自分たちのまちを改めて見直す機会となりました。お子さんを連れてお母さんも参加し、終始和やかなムードで行われました。☆



7月23日(土)

③ まちなかの多様な「働く」を考える

ゲスト 井上拓磨(HanaLab.) × 国保祥子(静岡県立大学経営情報学部)

キーワード 地域の人材プラットフォーム、地方の女性の働き方、学生/ビジネス/母親
国保氏からは研究者の視点で「女性の働く」を切り口に、子育てもキャリアも両立させる働き方、井上氏からは「日本の働く」についての問題と課題、コワーキングスペース HanaLab.での活動についてお話いただきました。その後はそれぞれが考えたことの意見を出し合い共有しました。参加者全員が「働く」ことについて向き合うことができました。☆

集中ゼミ

12月9日(金)、10日(土)

新しいアート・まちづくりについて考える

ゲスト 熊倉敬聡(芸術学、元京都造形大学教授) × 長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門助教)

「対話ゼミ」「実践ゼミ」の内容をふまえながら、新しいアート・まちづくりのありかたについて2日間じっくりと考える機会を設けました。熊倉氏による、資本主義とは違う経済の仕組みを作るためのギフトエコノミー・ワークショップ。長津氏による、アートと多様性をテーマにした、地方都市でのアートプロジェクトなどを事例にしたレクチャー。住友文彦、茂木一司も交えたオープントークイベントなどを通し、「豊かさとは何か」「これからの前橋」について対話を重ね、一緒に考えました。



実践ゼミ

「まちなかの場づくり」を考えるためのテーマを毎回設定し、各テーマに明るいゲストを招きました。レクチャーやワークショップ、フィールドワークなどの活動を通して、前橋にあるとよい場について具体的に可視化していきました。



9月11日(日)

① 武山直直さん(慶應義塾大学経済学部 教授)と考える、使う人がつくる場所

前半は、世の中にある全てのサービスの新しい作り方「サービスデザイン」についての講義。市場は常に進化していて、今までのように「必要なものを提供する」だけではなく、お客さんの生活全体にまで目を向けていく必要があるという視点を学びました。後半はワークショップデザイナー、竹丸草子氏のワークショップ。実際にまちなかへ行き、コミュニティスペースとしての活用を想定している空き物件を見学しました。それから前橋のまちにあると良い場について「ユーザー」「課題」「解決方法」といった視点を持って、カラフルなブロックを用いて具体的にプランニングしました。手を動かすと自然と対話が深まり、大人も子どもも一緒に盛り上がる活動になりました。



10月16日(日)

② 遠藤幹子さん(建築家)と考える、人の創造力の生きる場所

前半は建築家の遠藤氏が行ってきた、にしずがも創造舎の「カモカフェ」やアフリカのザンビアでのマタニティハウスなどの話を聞きました。お金がない中、参加者と工夫しながら場づくりをしていて、とても参考になりました。また前橋まちなかエージェンシーの橋本薫氏に、行政+企業+市民が1つになって取り組んでいる「めぶく」プロジェクトの話を聞きました。後半はグループに分かれてまちなかへ。開催中のイベント「前橋スマイルキャンパス2016」会場やまちなかで出会った方へインタビューし、普段の生活や求めている場など聞き出しました。そして、グループごとに話し合い、導き出したユーザー像と前橋に必要な場を発表しました。



11月20日(日)

③ 宮崎晃吉さん(HAGISO代表)と考える、つながるアクションの起こし方

前半は宮崎氏が代表を務める、東京・谷中にある「最小文化複合施設」HAGISO やまち全体をホテルにすることをコンセプトにした宿泊施設 hanare などの話を聞きました。まちの資源(空き家や商店街など)をとことん活用しつくすという考えに触れました。最後の「1つの目的に対して、手段は無限大ある」という言葉にすく納得しました。後半は竹丸氏にバトンタッチ。グループごとに分かれ、まちなかの資源を探しに行きました。参加者からチャタリングな場所、案外知らない場所がたくさんあるので、それらを発信する場や方法が欲しい。また、歩き回るのが一番楽しいから、駐輪場をつくり、そこを拠点にまち歩きをしてもらうなどのアイデアが挙がりました。



12月18日(日)

④ 稲庭彩和子さん(東京都美術館 学芸員)と考える、つながるコトづくり

約120人のとびラー：東京都美術館アート・コミュニケータ(サポーターではなく、一緒に働くプレーヤー)が活躍する「とびらプロジェクト」についての講義。大切にしていることは、話し方より聴き方、反省よりも振り返り、振り返りはビジュアル化する。終わり方/到達地点を最初にデザインすることだそうです。ワークショップでは、これまで重ねてきた講座での活動からベースとなるプロジェクト案を3つに絞りました。それをさらにグループ内で話し合い、イメージを膨らませブロック作品で視覚化し、みんなで共有しました。①キッチンカフェ ②スタジオルーム ③いろいろな人が出会える場、プロジェクトとして立ち上がりそうな企画案も出てきました。



Bコースのポイント

多様な参加者



各回限りの単発受講希望者も受け入れられました。子育て中の方でも参加しやすいよう、子どもスペース(遊び場)を設置するなどして、テーマに興味を持つ多様な方にプログラムを体験してもらえるようにしました。

話しやすい場づくり



アイスブレイクを行う、ゲストも受講生も円形に並んで座る、参加者の発言にきちんと耳を傾ける「哲学カフェ」的なルールを取り入れるなどして、話しやすい場づくりを心がけました。

グラフィックレコーディング



ゲストによるレクチャー内容やディスカッションのポイントをリアルタイムで整理しながら、図柄も入れてわかりやすく記し残すグラフィックレコーディングを行いました。

ワークショップ



話を聞くだけでなく、それをふまえて新たな活動を考えるワークショップを繰り返しました。カラフルなレゴやふせん、ワークシートなどを使い、考えたことを様々な形で視覚化しました。

フィールドワーク

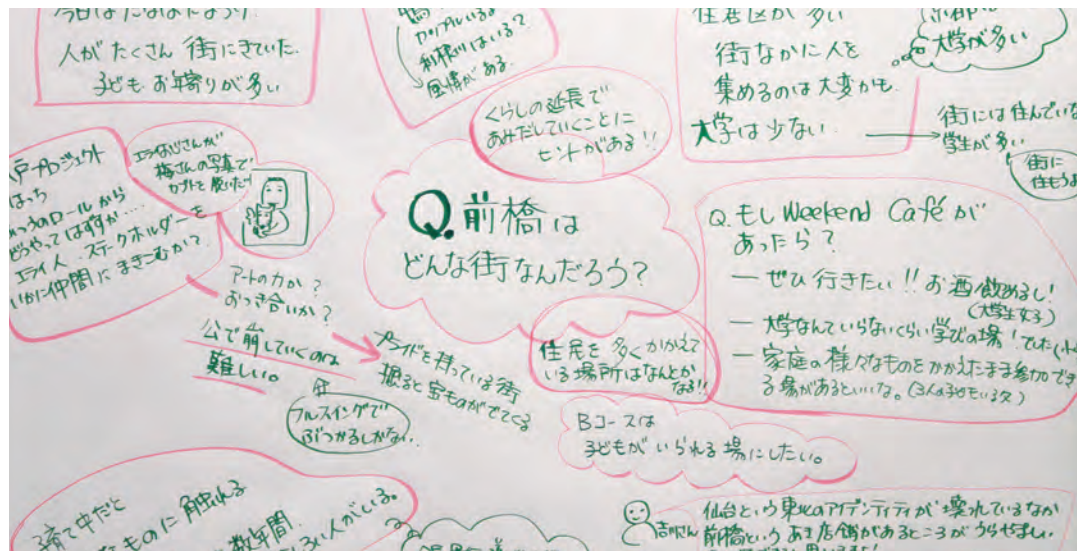


実践ゼミでは講座会場にとどまらず、講師やコーディネーターと共に実際に前橋のまちなかへくりだし、リサーチやインタビューに取り組むフィールドワークの機会を設けました。

前橋まちなか研究室



前橋中央通り商店街の一角で田中仁財団が運営する「前橋まちなか研究室」も会場として活用し、前橋におけるまちなか活性化プロジェクトの事例を体感しました。



受講生の声

実際に前橋を活性化するために、年齢も性別も異なる方とお話をして、自分が今まで1つの方向からしか見えていなかったことを、他の方向から考えるきっかけとなった。レゴブロックを用いた講座では、話をしながらこういう町になったらいいな、と想像しやすく話も弾みとても楽しく考えることができてよかった。(市村彩奈)

まちなかで行われていたイベントに、グループで分かれてリサーチに行ったのが非常に印象深く残っています。グループ内で話し合っていると、来ていたお客さんの層よりも理想のお客さんの層というのがあって、気がつくと、その理想のお客さんのことを想像しながらどのような動向の元、どういったお店があるべきかを話し合っていました。(富樫智子)

まだまだ、実践で生かせるような段階ではないが、じわじわ出来ることから考えて実際に結びつけていきたい。いろいろな場面で今まで蓄えた知識などを生かせたら良さそう!とか、その必要性も感じるものがいくつかあったので、うまく何かしら噛み合わせて、アイデアを投入し実践して行けたら理想的だと思う。(吉田美雪)

プロジェクト評価のためのロジックモデル(案) ※ 集中講座ワークショップにより作成(原案:熊谷薫)



総括

6月から12月までの半年間、全3回の対話ゼミ、全4回にわたる実践ゼミ、そして2日連続の集中講座を通じて、多様な人々が自らの力を活かし、いきいきと暮らしていくために、「前橋のまちなかに、どのような場があるとよいか」について議論してきた。対話ゼミでは、各回2名ずつ計6名の多様な分野のゲストと共に場のイメージを膨らませ、実践ゼミでは、経験豊富なゲストの活動を参考にフィールドワークやワークショップを通じてアイデアを構想。また集中講座では、より大局的な視点から豊かな暮らしを実現する前橋の未来について語り合った。「誰にでもオープン」な講座としたため毎回初めて参加する人が加わり、最終的に参加者総数は合計約80人に。終盤には参加者同士の関係も深まり、実践ゼミは毎回13時から18時までと長丁場だったにもかかわらず、ゲストの話に熱心に耳を傾け、ワークショップでは熱い想いやアイデアが飛び交うようになった。こうしたプロセスを経て、私たちに必要な場のイメージが次第に明らかになってきた。それは、女性や若者、シニア層など多様な世代の人々がまちなかに集まり、そこでの様々な創造的な出会いを通じて、自分自身の想いを確かめ、地域との関わり合いを実感し、前橋ならではの新しいライフスタイルを創出していけるような、多彩なエンゲージメントのハブとなる場である。ここで描かれた場のイメージがどのように展開するかはまだ未知数だ。しかし、東京にはない「前橋のまちなかのオルタナティブな文化」が、さらなる多様性と広がりを持つために、そうした空間装置が大きな機能を果たすに違いない。そんな期待感に満たされた講座のエンディングであった。

坂倉 杏介(東京都市大学都市生活学部准教授)

実践講座 C | まえばし未来アトリエ

「インクルーシブ美術教育による社会実験：広瀬川美術館からの発信！」をテーマに、かつて子ども絵画教室「ラボンヌ」と大人向け講座「生活造型実験室」によって地域・市民の美術教育の拠点であった広瀬川美術館(画家・近藤嘉男氏旧アトリエ)を活用して、この場を「まえばし未来アトリエ」として再生することを目指しました。

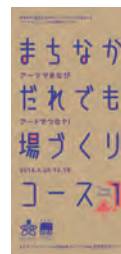
- ① 展覧会の計画・実施に取り組む実践講座、② インクルーシブカフェ「kinäii / きない」(さまざまな人たちのアートによる居場所づくり、子どもや親子対象のワークショップ実施)③ インクルーシブアートに関わる出前ワークショップの実践、④ まえばしアートスクール計画研究会(地域の美術教育にかかわる人たちの情報交換および学びの場)の4つの事業で構成され、これらの活動を通して受講生と共に「アートでつなぐ場」としての新たな意味や価値の創出と、発信を試みました。



実践講座 B | まちなかだれでも場づくりコース

インクルーシブ×サスティナブル×クリエイティブな地域活動拠点づくりのマネジメント

日程	平成28年6月25日(土)～12月18日(日) 全9回
会場	アーツ前橋スタジオ、前橋市中央公民館(前橋プラザ元気21)、前橋まちなか研究室
受講生数	15人
コーディネーター	坂倉 杏介、井尻 貴子
ワークショップ	竹丸 草子
スタッフ	保手濱歌織、佐藤宏樹、相嶋亜紀子、山口千咲
パンフレット編集・デザイン	デザインユニット つむり



坂倉 杏介 (さかくらきょうすけ)
東京都市大学都市生活学部准教授。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。同グローバルセキュリティ研究所特任講師を経て現職。「芝の家」や「ご近所イノベーション学校」の運営など、コミュニティの形成過程やワークショップの体験デザインを実践的に研究。三田の家LLP代表。NPO法人エイブル・アート・ジャパン理事。NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所副代表理事。



井尻 貴子 (いじりたかこ)
NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所事務局長。早稲田大学第一文学部(美術史)卒業、大阪大学大学院文学研究科(臨床哲学)博士前期課程修了。財団法人たんぼの家、公益財団法人東京都歴史文化財団東京文化発信プロジェクト室等を経て、現職。同時に、フリーランスとして主にアート、哲学に関わるプロジェクト等の企画、運営、コーディネート、記録編集などを行っている。共著書に、『哲学カフェのひらきかた』、『病院とアート - 医療現場の再生と未来』など。



実践講座

広瀬川美術館における3本の展覧会の開催を主軸に、週末の講座では展覧会のコンセプトにちなんだゲスト講師による講座や展示づくりを展開しました。

5月22日(日) 全体ガイダンス+他已紹介ワークショップ

6月5日(日) オープニングパーティー準備講座+大学院生考案ワークショップ

6月11日(土) オープニングパーティー事前準備

6月12日(日) オープニングパーティーの実践

ゲスト 山崎法子(群馬大学)、富岡恵美(渋川特別支援学校)

わたしのアートエデュケーション展



学校教育で行われてきたフォーマルな美術教育と、「わたし」ならではのアートをつくりあげてきた、日常生活におけるインフォーマルなアート活動を視覚化し、両者をフラットにつなげることで新たなアートエデュケーションの姿を形づくることを試みました。

受講生は、それぞれが学校教育で制作した作品と、日常生活の中で自分自身のアートを形成してきた「もの」(書籍、作品、道具、CDなど)を持ち寄り、本展覧会用に開発した「問診票」と「診断書」の2種類のワークシートを使って両者の共通項を探ったり、アートとしての価値を捉えなおしたりする活動に取り組みました。展覧会当日は、持ち寄った作品と「もの」、ワークシートを展示しました。

7月10日(日)、17日(日) 準備講座

7月24日(日) 展示設営講座

7月26日(火)~8月7日(日) 展覧会期

7月31日(日) 関連シンポジウム「ラボノヌと生活造型実験室」

出演 染谷滋(元富岡市立美術博物館館長)×茂木一司×春原史寛

8月7日(日) 展示撤収作業

とがび展@まえばし未来アトリエ



長野県の美術教師・中平千尋氏(享年 48 歳)が12年間実践した「とがびアートプロジェクト」の記録や作品を紹介する展示。受講生は、プロジェクトに関わった当時中学生だった方たちやアーティストらの話を聞くことを通して、中平氏の美術教育への姿勢や実践内容を知ると共に、展示室を教室に見立てた展示づくりをNプロジェクトと取り組みました。とがびにおいて中学校内に設置された、中学生の自由な表現活動の場である「カオスギャラリー」を現役中学生と館内に再現する企画や、住中氏提案の「カオステーブル」で“やったことないけどやってみよう”と、“好きなこと・趣味”を組み合わせたアクティビティを立案・実践しました。

8月21日(日) 講座「学校の中の自由を考える」

講師 住中浩史(アーティスト)

9月10日(土) 展示物作成&準備作業

9月11日(日) 展示設営講座

講師 小林稜治(Nプロジェクト)

9月13日(火)~9月25日(日) 展覧会期

9月18日(日) 関連シンポジウム「中平千尋のとがび…それ以降…美術教育はこれから何ができるのか」

出演 中平紀子(長野・小布施中学校)×小林稜治(Nプロジェクト)×住中浩史(アーティスト)×杉浦幸子(武蔵野美術大学)×茂木一司

9月25日(日) 展示撤収作業

まえばし未来アトリエの学び展



5月から始まったCコースの実践講座における、受講生と講師たちの学びをまとめた展示。これまでの活動について、受講生が概要とふりかえりをまとめたパネルと、関連する「もの」を展示しました。「まえばし未来アトリエ」を拠点に、展示づくり、ワークショップ、カフェなどを実践することを通して、子どもや障害者、高齢者などのアートから遠いところにいる人たちを、アートでつなぐことを試みた本コースでの学びの成果を展示することで発信しました。

1月8日(日) 展示設営講座

1月10日(火)~1月22日(日) 展覧会期

1月15日(日) 展示物作成ワークショップ

1月22日(日) 関連シンポジウム「高齢者とアート—インクルーシブアートを考える—」

出演 鈴木理恵子(女子美術大学特任准教授)×藤原ゆみこ(美術家・アトリエナン主宰)×茂木一司

1月22日(日) 展示撤収作業

インクルーシブ・カフェ「Kinäii(きない)」



戦後からある広瀬川美術館を知る人も少なくなく、一般の来館者や芸術家が集まりました。企画展の鑑賞後に休む場としてだけでなく、偶然出会った来館者同士での対話も始まりました。また、ワークショップを定期的に企画し、子どもから大人、高齢者まで、幅広い世代が共に過ごせる場になるよう目指しました。

インクルーシブ・ワークショップ

高齢者福祉施設、ダウン症児支援サークル、障害者施設を対象に、アーティストが行うワークショップを出前し、受講生はファシリテーターとして参加しました。そのなかでアートが人に、何をどのような方法でもたすのか、その可能性について学びを深めていきました。



10月22日(土)

① デイサービスセンターえいめい

講師 砂連尾理氏(ダンサー)

砂連尾理さんのワークショップは気功でいうところの対気(気の交流)だと感じました。まず利用者様 Aさんと向かい合います。Aさんの顎先に時間を掛けてゆっくり私の指先を近づけて行きます。静電気に似た「気」なるエネルギーを感じる瞬間です。触れ合うと笑い声が出ます。2人の足裏をくっつけて色々な動きを楽しみます。2人の気がこねこね練られて大きくなります。気は2人の身体だけでなく周囲にも広がりますように優しく温かく2人を包み込みます。Aさんはあの日冷え気味の体は温かくなり寝つきも良かったことでしょうか。☆



11月20日(日)

② バンビの会(ダウン症児支援サークル)

講師 近藤愛子(アーティスト)

薄葉紙(商品などをつむむ紙)を使い、割れ物、あったかいもの、冷たいもの、光るものなどさまざまなものをつんでいくワークショップ。ダウン症の子供とそのご家族に受講生やバンビの会のメンバーが付き、ともに活動を行いました。ものをつつむだけでなく、人をつつむ、つつまれる、自分の身体でつつむなど様々な行為がおこっていました。また、他の人がやっていたことを真似するなど周囲との関わりもあり、活動が広がっていく様子も感じられました。☆



12月17日(土)、18日(日)

③ 大阪: デイサービスエシュロン、ひと花センター

講師 木村祐子、手塚千尋

昨年度のスタートアップ基礎講座にて講師としてご登壇いただいた上田假奈代さんが代表を務めるNPO 法人こえことばとこころの部屋(ココローム)が主催する釜ヶ崎芸術大学から実践の場を提供いただき、2日間連続で実施された大阪出張のワークショップ。受講生と講師が釜ヶ崎芸術大学の拠点である大阪西成区に行きました。初日はデイサービスエシュロンにてiPad を利用した映像づくりのワークショップ、翌日はひと花センターにて、ハッピーカルタというワークショップを実践しました。大阪で実施したことを感じさせる、50枚の特徴的で素敵なカルタができました。



12月23日(金)

④ 社会福祉法人 はーとわーく

講師 中津川浩章(アーティスト)

色とりどりの絵の具に筆や刷毛、ローラーをひたす。「まずは真っすぐな線を描こう!」という中津川さんの声をスタートの合図に、カラフルな線たちが3×3メートルの紙の上を走り出す。利用者さんも、職員さんも、受講生も、子どもも大人も、ほかの人の色とぶつかっても良い。みんなで1枚の大きな紙に描くことはとても楽しかった。人とぶつからないようにすることは良いことだけど、ぶつかってみたいと分からないこともある。☆

研究会

前橋を中心とした地域のアートや教育、福祉などの関係者を集めた研究会を実施して意見交換や議論を行い、特別講師によるアウトサイダーアートや高齢者、フリースクールなどアートにおけるインクルーシブな活動についてのレクチャーを実施しました。

7月13日(水) ① アウトサイダーアートについて

ゲスト 柳野展正(クシノテラス主宰)

10月25日(火) ④ 問題提起・意見交換

発表 多胡宏(群馬県立盲学校校長)、小田久美子(アーツ前橋学芸員)

8月11日(木) ② 認知症/高齢者の方の対話型アート鑑賞法について

ゲスト 林容子(一般社団法人アーツアライブ代表理事)

11月22日(火) ⑤ 演劇とLGBTについて

ゲスト 関根信一(俳優/演出家/劇作家/劇団フライングステージ代表)

9月19日(月) ③ フリースクールについて

ゲスト 堀真一郎(学校法人きのくに子どもの村学園理事長/元大阪市立大学教授)

1月17日(火) ⑥ アーティストインスクールについて

ゲスト 堤康彦(特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち代表)

受講生の声

大学内では学べない経験をする事で広い視野をもつ、「アートとはなにか」「美術館がどんな場所なのか」を深く考える、多様な職種の人とかかわるなどの経験を得た。様々な分野の人の話を聞けたり、おもしろいワークショップを経験できたりしたので、それを元に普段から多様なことを考えるきっかけになった。(羽鳥麻依子)

アートとは?を考えることができました。講義などで、様々な表現のカタチに出会えました。それぞれが抱えている問題を解決に導くためのアート、社会と繋がるためのアートなど、それぞれの可能性に触れることができました。(横山知美)

アートは何かと何かを繋ぎ密着させることだと感じました。エデュケーション展では過去と現在。起き上がった感情は「後悔」。とがび展では学校での無機質な自分と知って欲しい本当の自分。感情は「不満」。砂連尾さんのワークショップでは初対面のご老人と関わりかたに戸惑う自分。感情は「ときめき」。アートにはこのような作用がある、もっともっと面白い組み合わせがあるかもしれないと思いました。(佐藤裕子)

プロジェクト評価のためのロジックモデル(案)

※ 集中講座ワークショップにより作成(原案:熊谷薫)



総括

講座の前半（実践講座①～⑧）は、「ゆさぶり期」（この講座自体が大きなゆさぶりを掛けてはいるが…）として「多様なアートの在り方」に気づくことをねらいに、「自分（わたし）」を出発点にした「アートとは何か？」を探求できるようにした。実践講座①～⑦では、各展覧会を軸に、1) 広瀬川美術館（展覧会）／ワークショップやイベントへのアクセシビリティについて考える、2) 多様なアートの在り方に気づき理解する、3) 学校の中と外の美術（アート）について自覚し考える、4) 展示づくりを学ぶ、の4点についてワークショップ形式で学べるように活動をデザインした。初めの「わたしのアートエデュケーション展」では、受講生が自らの受けてきた美術教育の履歴を振り返り、現在の自分のアートにつながる活動と結びつけるプログラムを構築し、企画者と来場者との対話のメディアである「展覧会」の形式でその成果を提示した。受講生は自分に内面化されたアートと美術教育のつながりを意識して他者に提示することを学んだ。次の「とがび@まえばし未来アトリエ展」では、長野県で行われた中学生のためのアートプロジェクト「とがび」の紹介展の準備にともない、受講生はアートや学校における「自由」の意味や意義を対話によって学び、自分のなかのアートが社会とつながるどのような可能性を有しているのかを把握していった。

講座の後半（実践講座⑨～⑫）では、受講生はファシリテータとしてアーティストによるワークショップに参加し、そこで起きる出来事に立ち会うことを通して、アートという方法の特徴、多様性、可能性についての学びを深めていった。さまざまな対象者とのワークショップは受講生に、アートによって予想しなかった身体的な動きやコミュニケーションが引き出されたり、潜在化されていた自身の考えに気づいたりする場を提供したようである。

以上の展示とワークショップの成果を、受講生の振り返りによって総括的に構成したのが「まえばし未来アトリエの学び展」である。展示というメディアによって、受講生が自分の行為を他者の視線を意識しつつ、言語化し客観視できる機会になったように思われる。

春原 史寛（群馬大学教育学部准教授）

実践講座 C | まえばし未来アトリエ

インクルーシブ美術教育による社会実験：広瀬川美術館からの発信！

日程	平成28年5月22日(日)～平成29年1月22日(日) 全30回
会場	アーツ前橋スタジオ、広瀬川美術館、前橋市中央公民館(前橋プラザ元気21)、ほか
受講生数	21人
コーディネーター	茂木一司、春原史寛、手塚千尋、木村祐子
協力・支援	NPO法人まえばしプロジェクト



春原 史寛（すのはらふみひろ）

群馬大学教育学部准教授／NPO 法人まえばしプロジェクト。専門は近代日本美術史（岡本太郎研究、美術の受容史）。長野県生まれ。筑波大学大学院人間総合科学研究科修士。博士（芸術学）。大川美術館学芸員、山梨県立美術館学芸員、山梨県立博物館学芸員を経て2013年から現職。美術館では展覧会企画のほか、ワークショップなどの教育普及も担当。担当展「浅川伯教・巧兄弟の心と目—朝鮮時代の美」（2011年）ほか。



木村 祐子（きむらゆうこ）

前橋市地域包括支援センター永明勤務／NPO 法人まえばしプロジェクト。山口県生まれ。信州大学医学部保健学科卒業、群馬大学大学院教育学研究科修士。子ども病院で周産期医療や重症心身障害児における看護師勤務を経て、看護理論やケア論を元に美術教育学を学ぶ。現在は高齢者の在宅支援として保健師勤務。ほかに知的障害者や発達途上国子どもの表現活動などを研究中。

※ 茂木一司、手塚千尋はP.7参照

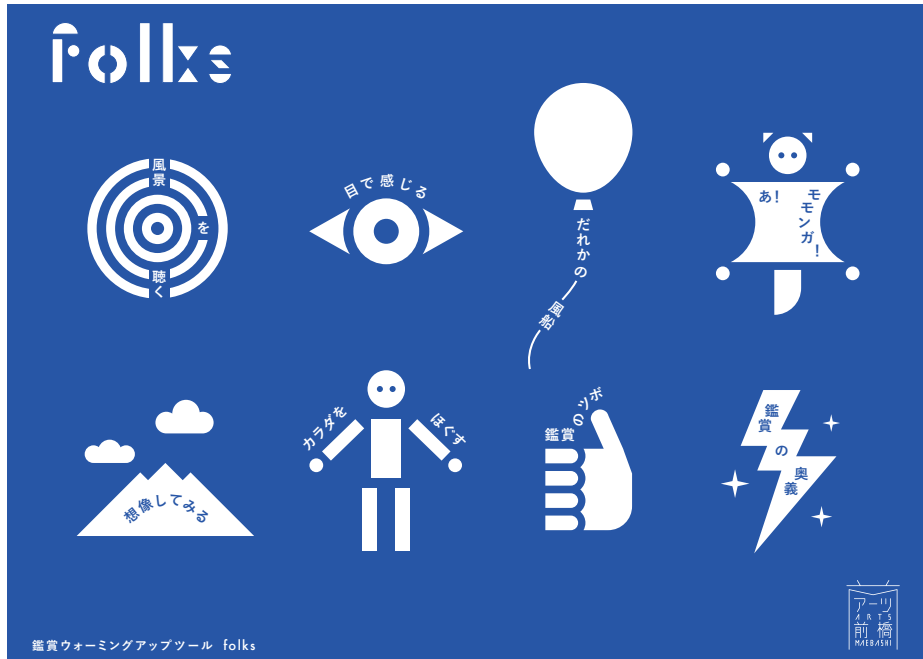
実践講座 D | 鑑賞学習アプリ開発とインルーシブなデザインアプローチ

鑑賞は表現・制作と表裏一体の活動であり、アートや美術館を楽しむ方法として有効です。本コースは昨年度から継続して開講していました。昨年度は美術家・映像ディレクター山城大督を講師として迎え、アーツ前橋オリジナルの『デジタル・ミュージアム・ガイド』のプロトタイプを発案・開発するアートプロジェクトに講座の受講生と共に取り組みました。開講2年目となる本年度は、鑑賞ウォーミングアップツール『folks / フォークス』の完成と公開を目指しました。講座ではメイン講師の山城大督を中心に、ゲスト講師として八巻香澄、会田大也、伊藤ガビン、ジュリア・カセム、ライラ・カセム、中西要介、林洋介らを招き、実践的な対話と考察を繰り返しました。



リサーチ制作(平成27年度)

アーツ前橋のオリジナル「デジタル・ミュージアム・ガイド」のプロトタイプを受講生と共に開発するアートプロジェクトを実施しました。最初から鑑賞ガイドのアイデアを考えるのではなく、まずは既存の鑑賞ガイドの分析を行い、鑑賞にまつわる事柄について、そもそも鑑賞ってなんだろう?など、リサーチに多くの時間を費やしました。



※ P.36の山城氏の総括の中に、1~8のコンテンツ紹介がありますので、ご参照ください。

既存の鑑賞ガイド分析

パンフレットやジュニアガイド、アートカードのような紙媒体のガイド、音声ガイドの事例、スマートフォンにインストールして使用する鑑賞アプリなど、さまざまな鑑賞ガイドを受講生が調査し、それらを持ち寄り対象者や使用方法などを分析しました。また、各自が考える鑑賞ガイドのアイデアを発表、分析しました。

成果 鑑賞レベルの発見

ターゲットとなるアーツ前橋の利用者には「通りすがり」「どうやって見るのかわからない」「もっと知りたい」の3つの鑑賞レベルが想定される

自分の鑑賞や他者の鑑賞を分析

アーツ前橋の企画展示の来館者アンケートを見て、鑑賞者がどのようなことを考えているのか。また、自分たちでも展示を鑑賞し、自分がどのようなルートで館内を進み、各所でどのようなことを考えたのかを、館内マップに記入。その後、各受講生がどのような鑑賞の仕方しているのか分析し、1人1人が鑑賞ガイドのプロトタイプを考え、発表しました。

成果 鑑賞に関わる時間の段階の存在

それぞれの段階に応じて異なるガイドが想定され得る、ということがわかる

タイムライン	想定されるアプリ
(鑑賞外)	施設、コミッションワーク紹介 (スタンブラリー、鑑賞の誘い)
鑑賞前	鑑賞ウォーミングアップ → プロトタイプ制作(H27) (実践、チュートリアル) → コンテンツA(H28)
鑑賞中	オーディオガイド、キャプション、ハンドアウトなど
鑑賞後	意見共有、作品情報の提供 → コンテンツB・C(H28)
(鑑賞外)	施設、コミッションワーク紹介



プロトタイプ制作(平成27年度)

リサーチを元に、鑑賞ウォーミングアップツールを制作、体験会を実施しました。

鑑賞ウォーミングアップツール【folks / フォークス】

美術館で作品を鑑賞するとき、「自分には難しい、分からない」という抵抗感や「興味はあるけれど、どのように鑑賞したら良いのだろう」と戸惑い、「何か作品を鑑賞するための作法があるのではないか」と感じる人が多いのではないのでしょうか。もしなにかしらの作法があるとしても、それがすべての美術作品に当てはまるというわけではありません。美術作品の鑑賞には、鑑賞者が発見や気づき、感動を得ることで自分自身の価値を見つめ直すという要素が含まれています。それらにおいて、難しい知識は必要とされません。そこで私たちは、作品に対する抵抗感や戸惑いを解きほぐしたいと思いました。そのためには鑑賞の作法ではなく、鑑賞者が作品から発見や気づきを得ることのできるウォーミングアップを鑑賞ツールとしてできないかと考え、現在に至ります。(受講生作成のプレスリリースより)

ディレクション：山城大督、デザイン：中西要介、プログラミング：林洋介

所要時間は15分程度。iPad miniを持ち、ヘッドホンを装着してスタート。

音声や画面の指示に従って館内の交流スペースや館外を行き来する(展示室には入らない)。アーカイブスペースでイヤークリーニングをし、何気なく聞こえる物音に改めて耳を澄ます。エレベーターで屋上へ上がり赤城山を眺め、ホットミルクを飲む。iPad miniに表示された電話番号に電話をし、空に飛ぶ赤い風船を見る。詩的なつぶやきを聴きながらゆっくり階段を下り、スタート地点へと戻る。というような内容。「日常」を日常的な(エコノミーな)視点とは異なる視点から眺めることで、普段は気がつかないことへの気づきや、新たな発見を促しました。

体験会 平成28年1月9日(土)、10日(日) ※2日間で約80名が参加



コンテンツ制作

平成27年度に制作した鑑賞ガイド folks をバージョンアップし、鑑賞ウォーミングアップツール《folks / フォークス》として3つのコンテンツを制作しました。

コンテンツA：鑑賞ウォーミングアップツール (鑑賞のための準備体操)

コンテンツB：鑑賞ガイド(展覧会や作品について深く知る)

コンテンツC：感想シェアノート(感想の共有)

また制作と並行して、毎回異なるゲストを招いてお話を聞き、制作中の folks について意見をうかがい制作内容に生かしました。

ディレクション：山城大督

デザイン：中西要介

プログラミング：林洋介(ウォーミングアップツール)

竹谷康彦(ガイドツール)



レクチャー



8月14日(日)

ゲスト 八巻香澄(東京都庭園美術館)
 東京都庭園美術館での、これから展覧会を見る人の身体をほぐす・心をほぐす試みについての話、そして「ウェルカムルーム」についての話を聞きました。「ウェルカムルーム」では、展示室では通常禁じられがちなおしゃべり、撮影、そして「さわる」こともできます。目の不自由な人でもいろいろな素材で作られているので、手で見て楽しめる工夫がされています。「さわる小さな庭園美術館」というツールは、これから館内をめぐる人の心の準備や、他者とのコミュニケーションを促すのに役立っていること、また常にワークシートや型紙などを用意して来場者が「そうぞう」(想像/創造)できるように仕組みにしていることなど、アプリ開発のヒントとなる要素を学びました。



10月8日(土)

ゲスト 会田大也(ミュージアムエドゥケーター)
 山口情報芸術センター [YCAM] で関わっていた教育普及プログラム、コロガル公園やコロガルパビリオンの話を中心に、自身の大学の卒業制作、価値、お金や言葉の機能、メディア、終焉の話などを聞きました。“作品を見る”ということとは、“自分自身が変わっていている”ということ。他者と視線を共有し、対話しながら鑑賞していくことが大切であると学びました。ウォーミングアップ鑑賞ツールについては、イヤークリーニングや目の体操など、フィジカルなウォーミングアップのコンテンツがあるので、物事を「そもそも」から考えるような、頭のストレッチになるようなものがあってもいいのではないかと提案されました。



11月12日(土)

ゲスト 伊藤ガビン(編集者)
 これまでの仕事や、自身が関わってきた展覧会についての話を聞きました。「GAME ON」展では、ゲームに対する見方を変えるために、ゲームの面白さを可能な限り分解しました。美術はコンテキストがあるものです。流れを見れば、次が分かってくる。新しいものをつくろうとするなら、良く調べることが重要というレクチャーを受けました。後半は、会期中の「フードスケープ 私たちは食べものでできている」を鑑賞した後、作家にインタビューした動画「コンテンツB：鑑賞ガイド」を全員で見ました。鑑賞ガイドなどを用いて美術館や展示の中でその「知る体験」を完成させなくてもいいのではないかと、作家インタビューなどは家で聞いてもいいのではないかと、といったことが提案されました。



11月26日(土)、27日(日)

ゲスト ジュリア・カセム(京都工芸繊維大学特任教授)、ライラ・カセム(東京大学先端科学技術研究センター特任教授)
 Cコースと合同での講座。インクルーシブデザインについて、講義とワークショップを開催。ジュリアさんからは京都工芸繊維大学での取り組みや、海外の美術館の事例について聞きました。視覚障害者とともに企画した展覧会で音声ガイドを制作したときは、「見える人/見えない人/美術に詳しい人」向けの3種類を制作したとのことでした。アクセスしにくい状況というのは物理的/経済的/社会的/言語的などの理由があるが、鑑賞アプリ開発の上では「認知的なアクセス」を考慮する必要があることを学びました。ワークショップでは、3グループに分かれて、アーツ前橋と周辺をつなぐような物語をつくる課題に取り組みました。悩みながらも充実した2日間でした。

受講生の声

山城さん、アーツ前橋の学芸員さん、受講者でただひたすら話し合っていた昨年度とは異なり、教育普及や展覧会構成などのお仕事をされているゲスト講師の方々にお話を聴くことで、そこから鑑賞アプリに還元できそうな事柄や考え方を得ることができました。昨年度よりも多くの視座から鑑賞アプリを考えることになりました。(岩田ちひろ)

コンテンツ制作のため、作品の制作者へのインタビュー収録を行った際に、各制作者さんのお話に統一感を出すのが難しかったです。質問の意図の伝え方、回答のうながし方、インタビューの長さやそれを見せる時の画面の大きさなどを工夫していく必要があると思いました。(藍場千裕)

例えば障がいのある人をプロセスに入れるのはとても大変な事だが、そうしてできたものをそのまま提示するのではなく、ちゃんとした技術や知識のあるデザイナー等が美的な洗練を加えてカタチにする、という話は、美的な意味でもインクルーシブ(包括的、排除しない)という考えをさらに体現する重要なことなのだと、とても印象に残っています。(吉田美雪)

プロジェクト評価のためのロジックモデル(案) ※ 集中講座ワークショップにより作成(原案:熊谷薫)



総括 鑑賞するための“カラダ”のほぐし方を考えるプロジェクト

美術館で作品を鑑賞するとき、「自分には難しい、分からない」という抵抗感や「興味はあるけれど、どのように鑑賞したら良いのだろう」と戸惑い、「何か作品を鑑賞するための作法があるのではないか」と感じる人が多いのではないだろうか。私たちは、作品の歴史的背景や作家情報、鑑賞の作法などを解説するツールではなく、鑑賞者自らが作品から「発見」や「気づき」を得て、“カラダ”をほぐし「感覚を開く」ことのできる『鑑賞ウォーミングアップ』を、新しい形式の鑑賞ツールとして提案できないかと考え、開発を進めてきた。本年度開発した『鑑賞ウォーミングアップツール《folks / フォークス》』のコンテンツは以下の8つだ。

- 1 『風景を聴く』 音声に従い、サウンドワークショップ『イヤークリーニング』を実施
- 2 『目で感じる』 微細な色の違いを見分ける、色彩を感覚で捉える、色彩選択ゲーム
- 3 『カラダをほぐす』 玩具のようにデバイスを操作して、バランス感覚で音と戯れる
- 4 『あ!モモンガ!』 他者が鑑賞する様子を収録した動画を、解説コメントと共に見る
- 5 『だれかの風船』 他者の鑑賞を見ることで自分とは違った視点を知る
- 6 『鑑賞のツボ』 「身軽で見よう」「キャプションを見てみよう」など展覧会を見るときのコツを伝授
- 7 『鑑賞の奥義』 「展覧会を2周する」「企画者の視点で観察する」など展覧会の見方上級編
- 8 『想像してみる』 音声に従って屋上へ移動。赤城山の頂上を「想像する」ツアー型のワークショップ

まだ実際に現場で使用する完成度に到達しているとは言えないが、本年度は2度のプロトタイプ体験会を実施することにより、体験者の分析と考察を蓄積することができた。何よりも、本プロジェクトの一番の成果は、「鑑賞」について思考する人材(会社員、主婦、学生、美術教諭、美術関係者、大学教員、作家など)が、この2年間を通してアーツ前橋を中心に集った事であると考えている。今後もこのコミュニティを継続し「鑑賞」と「表現」の関係について研究し発信していくことを強く期待する。

山城 大督(美術家/映像ディレクター)

集中講座 | アートプロジェクトを「伝える」「残す」術を身につける

実践講座受講生を対象に「広報・記録・アーカイブ・評価」をテーマとしたレクチャーやワークショップを実施。実践の場で生かせる知識と具体的な手法を学びました。写真・映像撮影、インタビューの取り方のコツを知る、活動を広報するため、報告書に収録するための原稿制作に取り組んでみる、評価のためのロジックモデル(案)を作成してみるなど、各実践講座における取り組みを具体的に形にしてみる作業にも挑戦しました。また、中間報告会や最終報告会など、各実践講座受講生が集まる場での振り返りや、交流の場づくりなどを行いました。

**実践講座 D** | 鑑賞学習アプリ開発とインルーシブなデザインアプローチ

日程	平成28年8月14日(日)～平成29年2月18日(土) 全10回
会場	アーツ前橋スタジオ、前橋市中央公民館(前橋プラザ元気21)
受講生数	11人
コーディネーター	山城大督



山城 大督 (やましろだいすけ)

美術家/映像ディレクター。1983年大阪生まれ、映像メディアを用い、その場でしか体験できない《時間》を作品として展開する。アートユニット Nadeyata Instant Party を結成し、全国各地の美術館、芸術祭でプロジェクトを発表。山口情報芸術センター [YCAM] にてエディターとして、オンラインワークショップの開発・実施や、教育普及プログラムのプロデュースを担当。「東京映像芸術実験室」を展開し、企画内で制作発表した作品《VIDERE DECK / アイデア・デッキ》(2013) が第18回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品を受賞。明治学院大学・京都造形芸術大学非常勤講師。

レクチャー・ワークショップ



5月14日(土)

① ガイダンス/アートプロジェクトを「伝える」「残す」ために

担当 茂木一司、橋本誠、熊谷薫

各実践講座を横断して開催される集中講座のねらいや、この時代になぜアートが必要かということ、茂木から、熊谷・橋本からは、アートプロジェクトとはなにか、アートプロジェクトにおける記録と評価の重要性などの概論をレクチャーしました。また、グループに分かれて受講生間で自己紹介を行い、アートプロジェクトの運営に関わっている人から、アートプロジェクトという言葉は今初めて知った人など、いろいろな人が受講していることが明らかになりました。最後には、今後の各講座において活用できそうなツールや参考図書を紹介しました。

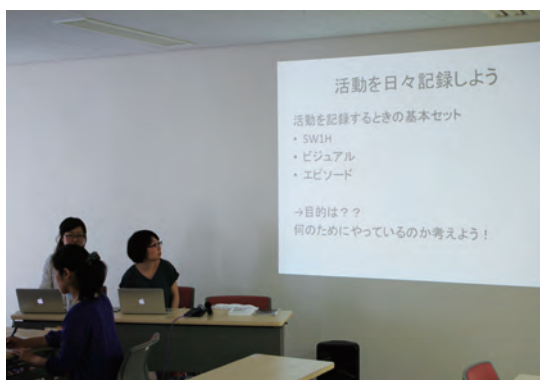


5月15日(日)

② アートプロジェクトと広報

ゲスト 鈴木潤子(@J)アットジャーディレクター

アートプロジェクトの魅力をどのような方に向けて伝えることができるのか。そのさまざまな考え方や具体的な手法について、実例の紹介・ワークショップを通して学びました。広報の定義についての概論、広報をする上で心がけていること、またアートプロジェクトにおける広報の業務の実例についてのレクチャーを行いました。また受講生には、昨年度の実践講座A/B/Cコース+中之条ビエンナーレの4グループに分かれ、それぞれの取り組みを教室内で広報するための話し合いと発表をしてもらい、鈴木氏からもコメントをいただきました。



6月5日(日)

③ アートプロジェクトの実践と記録術

ゲスト 石幡愛(としまアートステーション構想事務局長/一般社団法人オノコロ)

記録とは何か、なぜ必要なのかということ、まずは日々の生活の中での行為から考えました。受講生は3つのグループに分かれてディスカッションを行い、発表しました。続いて石幡氏から、アートプロジェクトにおける記録がなぜ必要か、また現場でどのように記録され、活用されているかということ、「クリエイティブサポートレッツ」、「としまアートステーション構想」を例に紹介いただきました。最後に各実践講座のチームに分かれて、ワークシートに沿ってプロジェクトの記録についてプランを練り、発表しました。



6月19日(日)

④ アートプロジェクトの実践と記録術

ゲスト 須藤崇規(映像エンジニア/ディレクター)

須藤氏から映像や写真を上手く撮る、実践的なコツ10項目を紹介していただきました。続いて実際にインタビューを記録するワークショップを行いました。受講生は4~5人のグループを組み、インタビューイー・インタビュアー・ムービーカメラマン・スチルカメラマンに分かれ、各実践講座の活動についての取材に取り組みました。終了後に、各グループの良かった点や改善点などを分かりやすく須藤氏に解説してもらい、フィードバックを行いました。また、データの整理方法などについてのレクチャーも行いました。

7月3日(日)

⑤ アートプロジェクトの価値を伝える取材・編集術

ゲスト 友川綾子(アトラライター/編集者)

広告・宣伝/広報/パブリックリレーションズの違いについて、また伝える対象であるステークホルダーを把握することの大切さなどについての概論、友川氏が関わったプロジェクトである「NIDF2014」を例にとった、具体的な制作物の展開や制作にあたっての考え方についてのレクチャーを行いました。また、各実践講座におけるアートプロジェクトのコンセプトや意義、ステークホルダーの洗い出しと使用できるツールについて話し合い、発表するワークショップを行いました。



8月7日(日)

⑥ 実践コース 報告と実務のワークショップ

担当 橋本誠、熊谷薫

橋本よりこれまでのレクチャーの振り返りや課題のレビュー、各実践講座の状況確認、アーツ前橋の広報誌「&Arts」やドキュメントなどの制作物を例にとり、記録・広報ツールの事例紹介を行いました。また、各講座や講座自体の取り組みをFacebook上で広報したり、ドキュメントに収録したりするためのテキストを書くワークショップを行いました。受講生は実際に書き、丁寧に添削してもらうことで、必要な情報と要らない情報が明確になり、活動を全く知らない他者に伝える難しさを実感していました。その一部は、編集の上、本書に収録しています。



9月25日(日)

⑦ 評価に関するレクチャー、ロジックモデルワークショップ

担当 橋本誠、熊谷薫

熊谷からロジックモデルを用いた評価について、〈かがわ・山なみ芸術祭2016〉を例にとり説明した後に、受講生が各実践講座の取り組みについて、ロジックモデルシートを作成するワークショップを行いました。受講生はこのシートの記入に苦戦していましたが、このワークショップを通して、受講している実践講座を俯瞰することができ、現在の到達度や最終目標が鮮明になりました。また橋本より、その後進めていく実施報告書(本書)の制作方法の説明や、台割など必要な書類についての説明を行いました。



報告会

12月11日(日)

中間報告会

ゲスト 鈴木一郎太(株式会社大と小とレフ取締役)

2月11日(土)、12日(日)

最終報告会

ゲスト 神野真吾(千葉大学教育学部准教授)、吉澤弥生(共立女子大学文学部准教授/社会学者)



各実践講座 A、B、C、D コースの活動報告、ゲストによる活動事例紹介などを行い、集中講座受講生以外の各実践講座受講生も集まる場とし、振り返りや、交流の場づくりなどを行いました。

集中講座のポイント

参考図書



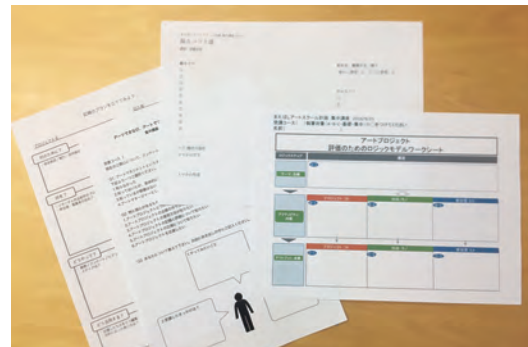
各実践講座のコーディネーターやゲストが関係するプロジェクトや、アートマネジメントに関わる資料を閲覧できるコーナーをアート前橋のカフェの一角に設け、講座実施日以外にも自由に閲覧できる環境を作りました。

クラウドツール



多様な人々が協働するアートプロジェクト運営を進める際に欠かせない、クラウドツールの事例紹介を兼ねて「Google Drive」を活用。課題やアンケートのフォーム提出、チラシや資料・記録データ格納などに使用し、アーカイブに適したフォルダツリーを作りました。

ワークシート・課題



各回の内容に応じたワークシートの活用やショートレポートの提出を通して、各実践講座の状況や受講生の取り組みに可能な限りフィードバックを加えながら講座を進めました。

実施報告書



ワークショップで制作したテキスト原稿を一部活用するなど、各回で取り組んだ内容を生かして実施報告書を作成しました。

基礎講座 | アーツが地域を拓き、地域はアーツを育てる

特別講座 | アーツ前橋「表現の森 協働としてのアート」展 関連シンポジウム

基礎

前橋をインクルーシブでサステナブルなコミュニティに再生することを意識して、「アートプロジェクトと学び」「食とアート」「福祉とアート」「映画とジェンダー」「医療とアート」「身体性のインクルージョン」などをテーマとした、各回単発でも気軽に参加できるゲストトークとディスカッションを全8回開講。また、アート前橋「表現の森 協働としてのアート」展と連動した関連シンポジウムも開催しました。多様なテーマや講師によって語られた、地域と関わるアートプロジェクトの可能性や課題は、参加者に多くの刺激を与えました。



集中講座 | アートプロジェクトを「伝える」「残す」術を身につける

日程	平成28年5月14日(土)～平成29年2月12日(日) 全10回
会場	アート前橋スタジオ、前橋市中央公民館(前橋プラザ元気21)
受講生数	31人
コーディネーター	橋本誠、熊谷薫
スタッフ	高橋尚子

橋本 誠 (はしもとまこと)
アートプロデューサー／一般社団法人ノマドプロダクション代表理事。1981年東京都生まれ・在住。横浜国立大学教育人間科学部卒業。東京文化発信プロジェクト室(現・アーツカウンシル東京)で「東京アートポイント計画」(2009～)の立ち上げに携わる。TARL(Tokyo Art Research Lab)事務局長(2012～)。主な企画に「生活と表現」(東京/2015～)、「KOTOBUKI クリエイティブアクション」(横浜/2008～)。共著に『現代アートの本当の学び方』(フィルムアート/2014)など。

熊谷 薫 (くまがいかおる)
デジタルアーカイブ・コーディネーター／アートマネージャー。1979年川崎市生まれ。東京大学美術史学科修士課程修了後、NYの市立大学に留学し戦後美術について研究、グッゲンハイム美術館でのインターンを経て帰国。東京文化発信プロジェクト室東京アートポイント計画プログラムオフィサーとして、アートプロジェクトの記録調査／アーカイブ／評価の一連の手法開発を試みた(2012)。現在アートプロジェクトなどの活動体へ、アーカイブや評価プロジェクトのコーディネートと普及業務に従事している。

基礎講座

ゲストによるトークと、コーディネーターを交えたディスカッション、参加者からの質問により、各回のテーマを深めて考える機会を設けました。

※ P.8～11「インクルーブ・キーワード」のコーナーにて、登壇者の印象的な発言を抜粋紹介しています。

5月14日(土)
講座1:アートプロジェクトにおける地域研究の重要性
ゲスト 山田 創平(京都精華大学人文学部総合人文学科長/准教授)
講座2:地域に根ざしたアートプロジェクトの実践とそのマネジメント
ゲスト 雨森信(大阪市立大学文学部特任講師/Breaker Project)

5月15日(日)
講座3:アートプロジェクトと学び
ゲスト 郷泰典(東京都現代美術館学芸員)
テーマ 美術館×アートプロジェクトの中の学び:東京都現代美術館の実践などを例にして
ゲスト 菊池宏子(アーティスト/コミュニティデザイナー)
テーマ アートプロジェクトの中の学び:アートと社会・地域をつなげるエンゲージメントとエデュケーション

6月19日(日)
講座4:食とアート
ゲスト 森岡祥倫(東京造形大学教授)
テーマ フードスケープ(食風景)のデッサン:〈食べもの〉と〈食べものではないもの〉のあわいに生きるといこと
ゲスト 中山晴奈(アーティスト/NPO法人フードデザイナーズネットワーク理事長)
テーマ 食はアートになりえるか?コミュニケーションツールとしてのフードを考える

7月16日(土)
講座5:福祉とアート
ゲスト 今中博之・三宅優子(アトリエ インカーブ)
テーマ アトリエインカーブのアートマネジメント:アートと福祉の間で起きていること
ゲスト 服部正(甲南大学文学部准教授)

テーマ 境界は揺らいでいるのか〜グローバル化と障がい者の創作活動

9月22日(木)
講座6:映画とジェンダー
上映 映画『トークバック 沈黙を破る女たち』
ゲスト 坂上香(映画監督)
テーマ 〈わたしはいかに沈黙を破れるか?〉女たちの演劇からの問いかけ
ゲスト 志尾睦子(シネマテークたかさき総支配人)
テーマ 上映者として見えてくるジェンダー『トークバック』を中心に

11月13日(日)
講座7:医療とアート
ゲスト 高橋伸行(アーティスト/やさしい美術プロジェクトディレクター)
テーマ やさしい美術〜医療福祉との協働によるアートプロジェクトの可能性
ゲスト 山口(中上)悦子(大阪市立大学大学院医学研究科医療安全管理学准教授/大阪市立大学医学部附属病院医療安全管理部副部長)
テーマ 創造的なコミュニティを育てるマネジメントのコツ〜病院の事例を参考に

12月4日(日)
講座8:身体性のインクルージョン ― 条件の異なる身体が関わる時に何がおこるか? ―
ゲスト 伊藤亜紗(東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授)
テーマ 視覚障害の場合
ゲスト 細馬宏通(滋賀県立大学人間文化学部教授)
テーマ 介護(ケア)の場合



会場 アーツ前橋スタジオ、前橋市中央公民館(前橋プラザ元気21)、シネマまえばし
参加者総数 のべ339人 コーディネーター 住友文彦、茂木一司

特別講座 | アーツ前橋「表現の森 協働としてのアート」展関連シンポジウム

現在進行形でアーツ前橋が活動を行う5つのプロジェクトの紹介から、第三者としての専門家の意見を踏まえ、それぞれの現場で生まれる課題や疑問を考える機会を設けました。

※ トーク・ディスカッションの一部は「表現の森」ウェブサイト上に掲載しています。→<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/>

8月27日(土)
トークセッション①「高齢者施設におけるアートの実践」
スピーカー 石坂亥士(神楽太鼓奏者)、山賀ざくろ(ダンサー)、岡安賢一(映像制作)× 木村祐子(社会福祉法人 清水の会)
ゲスト 林容子(一般社団法人 アーツアライブ 代表理事)
モデレーター 石原孝二(東京大学大学院総合文化研究科准教授)

トークセッション②「あかつきの村から考える共同体」
スピーカー 高山明(演出家/Port B)、林立騎(Port観光リサーチセンター)、田中沙季(リサーチャー)× 櫻井洋樹(社会福祉法人 フランシスコの町 あかつきの村 精神保健福祉士)
ゲスト 猪股剛(臨床心理士)
モデレーター 石原孝二

「当事者研究とオープンダイアログ:語り/表現の協働とネットワーク」
スピーカー 石原孝二

パネルディスカッション
スピーカー 林容子、猪股剛、石原孝二
モデレーター 住友文彦(アーツ前橋館長)

8月28日(日)
対談「くねくねアート道 ~ 生活とクリエイティビティのあいだ〜」
スピーカー 岡部太郎(一般財団法人 たんぼぼの家 常務理事)× 上田假奈代(NPO法人 こえとことばとこころの部屋 代表)
モデレーター 石原孝二、住友文彦

トークセッション③「社会における場づくりとアートの可能性」
スピーカー 滝沢達史(アーティスト)×佐藤真人(NPO法人 ぐんま若者応援ネット アリスの広場 施設長)、関根沙耶花(サヤカ・クリニック院長)
ゲスト 小山田徹(京都市立芸術大学教授)
モデレーター 茂木一司(群馬大学教授)

トークセッション④「表現の先に見る社会」
スピーカー 中島佑太(アーティスト)×朝比奈千鶴(認定NPO法人 日本紛争予防センター/JCCPケニア事業担当)
ゲスト 森玲奈(帝京大学高等教育開発センター講師)
モデレーター 住友文彦

トークセッション⑤「マイノリティとは誰か?美術館の抱える希望と課題」
スピーカー 廣瀬智央(アーティスト)、後藤朋美(アーティスト)× 町田和行(社会福祉法人 上毛愛隣社 のぞみの家 少年指導員)◎ 廣瀬智央はスカイプにて参加
ゲスト 黒沢伸(金沢湯涌創作の森 所長)
モデレーター 石原孝二

パネルディスカッション
スピーカー 岡部太郎、上田假奈代、森玲奈、小山田徹、黒沢伸
モデレーター 石原孝二

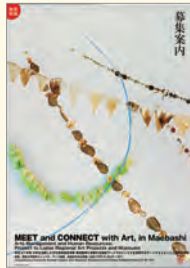


会場 アーツ前橋地下ギャラリー
参加者総数 のべ178人 コーディネーター 住友文彦、茂木一司、今井朋(アーツ前橋)

主な制作物

平成27年度

パンフレット



募集チラシ

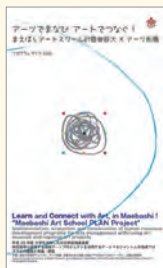


イベントチラシ(上毛鉄道ごちそうアートトレイン)



平成28年度

プログラムガイド



基礎講座チラシ



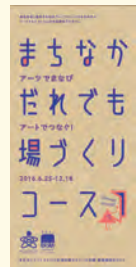
特別講座チラシ



集中講座チラシ



Bコースチラシ



Cコース招待状



Cコースチラシ



平成28年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業
美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成プログラムの構築と実施・評価
「アーツでまなび アートでつなぐ!まえばしアートスクール計画@群大×アーツ前橋」
(代表:群馬大学教授 茂木一司)

期間	平成28年5月14日(土)～平成29年3月31日(金)
会場	群馬大学荒牧キャンパス、アーツ前橋、前橋市中央公民館(前橋プラザ元気21)、広瀬川美術館ほか
主催	国立大学法人群馬大学
共催	前橋市
助成	平成28年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
後援	群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、朝日新聞前橋総局、産経新聞前橋支局、上毛新聞社、東京新聞前橋支局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、群馬テレビ、株式会社 エフエム群馬、まえばしCITY エフエム、ラジオ高崎
スタッフ	アーツ前橋学芸員: 家入健生、今井朋、小田久美子、辻瑞生 まえばしアートスクール計画事務局: 中島千尋、宮川紗織、福西みゆき 群馬大学院生・学生: 茂木克浩、高木露子、毛塚鮎美、羽鳥麻依子、中村桂子、岡本麻衣、狩野未来、木暮萌

実施報告書

発行	平成29年2月23日(木)
編集	一般社団法人ノマドプロダクション(橋本誠、高橋尚子、八重樫典子)
デザイン	安藤次朗 [LOVE AND PEACE]
写真	木暮伸也、志村真悠 (Lo.cul.p)、保手演歌織、まえばしアートスクール計画事務局
印刷	株式会社シュービ
監修・発行	群馬大学 茂木一司 研究室(群馬県前橋市荒牧町4-2)

LEARN AND
CONNECT WITH
ART \ MAEBASHI
ART SCHOOL
PLAN PROJECT